

■国分象太郎 対馬から翔けた通訳・外交官。  
こくぶんしょうたろう  
遣欧使節・1861＝ 対馬国厳原で支族国分建見の長男に生まれる。

明治維新・1868＝ 7歳：

初の日刊新聞1870＝ 9歳：

学問のすすめ1872＝11歳：この年、外務省が府中に設置した韓語学所に入り、  
明治6年政変 1873＝12歳：朝鮮釜山梁倭館に開設された語学所にも学んで、

沖縄県編入・1879＝18歳：釜山領事館の稽古通詞を命じられ、  
1880＝19歳：東京外国語学校に新設された朝鮮語学科に入学、対馬出身者は皆進級が早く、  
明治14年政変 1881＝20歳：  
新体詩抄・1882＝21歳：退学して実務につき、

内閣発足・1885＝24歳：京城領事館御用掛兼裁判所書記心得から、

初の対等条約1888＝27歳：領事館書記生、  
帝国憲法発布 1889＝28歳：

大本教・1892＝31歳：公使館二等通訳官となり、  
郡司千島探検 1893＝32歳：\*弟国夫が著した「日韓通話」に手を加えて出版、  
日清戦争始・1894＝33歳：金玉均が上海で殺害された頃から、朝鮮の督弁や大臣のもとに派遣されるなど、重用され、  
日清戦争終・1895＝34歳：\*閔妃事件で日本人関係者が即刻退韓するよう命じられた際にも、嫌疑を免れて滞留、閔妃・大院君の葬儀に列し、韓国大臣が話を聞くため唯一人招かれたりするなど、ますます重要な役割を持つようになる。  
八幡製鉄始・1897＝36歳：一等通訳官に昇り、

教科書疑獄・1902＝41歳：二等書記官となり、  
日比谷公園・1903＝42歳：在米日本公使館に勤務、  
日露戦争始・1904＝43歳：日露開戦直前に韓国に戻り、  
日露戦争終・1905＝44歳：日露戦争後の諸問題に対する日韓の意思疎通を託され、  
満鉄発足・1906＝45歳：\*特派大使伊藤博文の滞韓時の随行員として、第二次日韓協約締結交渉に同席、統監府設置とともに、書記官・秘書官・参与官を兼任。  
アラク創刊・1908＝47歳：「日韓通話」はこの年まで六版を数えるほど使われた。この年、故郷の対馬中学校生が修学旅行で来韓すると、自ら案内して喜ばせたほか、東京外国語学校韓国校友会の会長として、  
韓国併合・1910＝49歳：金沢庄三郎来韓歓迎会なども実施。日韓併合になると、総督府総務部人事局長・中枢院書記官長に昇任。  
大逆事件判決 1911＝50歳：朝鮮総督府に継承された朝鮮語ハングルの正書法の委員会に、塩川一太郎らと参加、  
明治天皇没・1912＝51歳：綴字法が確定され、改訂後「普通学校用諺文綴字法大要」として刊行される。

21ヶ条要求・1915＝54歳：李王職事務官となり、

ロシア革命・1917＝56歳：2代目の李王職事務次官となるが、李王が日本に赴き天皇と会見したのを皮切りに、  
本格政党内閣 1918＝57歳：李王世子と梨本宮方子の婚儀が決定するも、  
ベルシ条約・1919＝58歳：李太王が急逝し、独立運動が勃発、延期された挙式など、多難な業務に追われ、  
原敬首相暗殺 1921＝60歳：\*京城での宴席で倒れ、没した。

「韓国・朝鮮と向き合った36人の日本人」